

ギルティ
生きることの自責
——原爆文学を考える——

中川成美

圧倒的な「災禍」を前に文学はいかなることが可能か。それは3:11という未曾有の経験を経た2011年以降の日本文学の課題ともいえるほどに、観測史上類を見ない規模の東北地方太平洋沖は日本人、およびその災害に関心を寄せる人々に衝撃を与えた。存在の精神性に及ぶほどの災害を日本人の多くは忘れてしまっていたし、二度と起こりほしくないと思ひもなく信じ込んでいた。そしてこの災害が真に世界の恐怖として共有されたのは、震災とは切り離されて語ることが多くなっているが、震災と津波に被災した福島第一原子力発電所が爆発して放射能が排出されたことであろう。BBCの映像がいち早くこの光景をキャッチして世界配信したが、多くの日本人はこの情報は日本のテレビ局では視覚化されなかったために、ニュースの文言としてしかしばらくの間認知できなかった。

地震と津波によって死んだり怪我をしたりした2万人余りの被害、被災者を思いやる暇もなく生きる人間は放射能の恐怖と闘うこととなった。未来の自らの生のあり方を想像できなくなってしまったのだ。これが日本人の心性を変容させたのは明らかである。声を失うほどの現実を前にして、何も出来ない文学の無力を感じながら、一方にかつて私たちは同様の惨禍の中から新しい文学を生みだしたことを思い出した。それが原爆文学であったというのはあまりに理不尽な再帰であったと感じるが、圧倒的なカタストロフィを前にして人間は言葉など失わない事は、今残された多くの作品から証明されている。この3:11から文学は生まれるのか、いやそれより文学はこの「現実」をとどめることが出来るのかは、被災から2年余りを経た2013年の時点でも確かではない。文学や文化の研究者がなすべきこととして、既に過去に成しえていた「災禍の記憶」を丹念に掘り起こし、外部に紹介し、そのテキストから今後の私たちはどのような可能性を見出すことが出来るのかを探っていくことにあるような気がしている。「表象としてのカタストロフィ」とは、災害を表象化して現実と切り離してしまうのかという叱責も呼ぶかもしれない危険が伴うのだが、ここで強調したいのはかつて日本文学が描いた「災禍の記憶」を重ね合わせることによって、いま起きているこのカタストロフィの打開点を見出していきたいという意味である。そして付け加えれば、地震や津波という「天災」によって引き起こされた原発事故という「人災」の責任を誰もが取ることなく、2年余りを過ごすことのできる日本という国の不可思議な実情を考えていくためには、カタストロフィそのもののものに潜む複雑な意味の重なりを解明していかなければならない。現実の自然災害そのものが持つ事実と意味を越えて、人間はさまざまに自分のまわりを取り囲む環境に事象を連絡させて、その事実と意味を違ったものにならぬおしてしまうことが往々にしてある。文学分析の困難がそこにある。

1945年8月6日広島に落とされた原子爆弾は、人類史上稀にみる大惨事となって世界を震撼させた。続き9日には長崎に再び原爆投下があり、約15万人が死傷した。長崎市の当時の人口が約24万であることを考えると壊滅状態に陥ったと言うのが正しいであろう。1945年に「日本本土空襲」となって以来、死は日常のことであり、これほどに民間人の被害者を出した戦争は近代戦争の歴史の中でも特筆されることであろう。3月10日の東京大空襲、13日大阪大空襲、17日神戸大空襲、26日からの沖縄戦は6月23日まで続きついに占領された。この果てに二つの原爆投下があった。歴史の「もしも」は禁物だが、それでも1945年2月のヤルタ会談直後に戦争を終結させていたならば、これらのすべてがなかったはずであり、非戦闘員の一般民間人が死傷するということはなかったであろう。広島の死傷者約16万人、長崎の約15万人が生き延びることによってあったはずの別の歴史が8月6日と9日で断たれたことは正当なことであったか。原爆文学の主要なテーマはそこにある。

敗戦後すぐに活動を開始した峠三吉、原民喜、大田洋子らの苦難はGHQ支配下における言論統制との闘いでもあった。被爆体験を経て彼らは目の前にある情景がすっかりかわってしまったことを何度も訴えた。被爆直後のまさしく地獄のような悲慘も勿論だが、いま日常をとりもどしつつある広島の風景は、もはやかつてのようにこともなく眺めるものではなくなっていたのだ。あらゆる情景の中に封じ込められた原爆の記憶は彼らの存在の根拠を責めさいなむのだ。それは原爆に対する途方もない憤怒とともに、生き残った自責の念の間をたゆたってやむことはないのだ。

村上陽子氏の『原爆を見る眼—大田洋子「ほたる」論—』は作家のそうしたジレンマが刻印された作品である。「ほたる」を素材に、そこに「見られる」対象となっている原爆の不条理性を摘出している。本来は加害者として謝罪すべきアメリカ人によって何度もそのケロイドをさらさなければならぬ被爆者の曖昧な位置を、「視線」の交差によって読み解いていこうとする村上氏の方向は、無傷のままに生き残った日本人に主人公が注ぐまなざしに及んでいく。被爆しなかった人、被爆しても何も痕跡を残さなかった人々を異様と思う「私」の視線の複雑さは、「ほたる」の骨格をなす部分であろう。原爆文学という領域が成立していく過程で主要なテーマとなったのがこの複雑さである。

川口隆行氏の『核のカタストロフィと表象—原爆文学における日常の崩壊と再生—』でとりあげられるのは1960年代後半から70年代にかけて原爆文学をけん引した栗原貞子、石原吉郎が、原爆を「被害と加害が流動する記憶の場所」ととらえ、詩作を実践していったことである。それはある意味でカタストロフィの不条理性を表出する行為としてとらえうることが出来るし、だからこそ原爆文学の主要な作品となって現在に生き残っていったとも言えよう。

しかしながら、川口氏が次に紹介する長田新編『原爆の子』（1951）所収の田中清子氏の作文、サークル誌『われらの詩』に掲載された林幸子「ヒロシマの空」（1950）、望月久「とまどい—弔慰金によせて—」（1953）という二編の詩は、現実の惨禍の苦悩から抜けきれない被災者の実感をベースとして書かれており、不全のままに放置・宙吊りされた彼らの生のあり方、そしてその悔恨が如実に表現されている。ここでカタストロフィは文字通り、彼らの生のたたずまいの崩壊として描かれており、そこに通底するのは取り戻すことの出来ない圧倒的な哀しみである。誰に向かって告発することもなく淡々と自分の今の悲哀を語るのは、まさしく死者への追

悼であろう。しかし、その背部をなすのは生き残った者としての自責と、そこからの恢復をめざす意志の形である。とりかえしのつかないカストロフィを前に如何なる人間も無力に陥らざるを得ないのに、この作文と詩にはそこから自らの生を取り戻そうとする意欲が垣間見える。だからこそ、彼らは死者を思い出し続けなければならない。自らの生と引き換えに死んでいった人々を銘記し続けなければならないのだ。

ディスカッサントとして参加して下さった福間良明氏は『「忘却という継承」の消失—祝祭・遺構・モニュメント—』で非常に興味深い事実を報告している。被爆の翌年から広島市で開催された広島平和復興祭は、現在の原爆慰霊祭からは想像もつかないほど、どんちゃんさわぎの祭りであったということを聞いた時、私はそれが当然とも思えた。祭りは生き残った人間のためにあるもので、多くの祭りが神事や慰霊を標榜しながらも民衆の息抜きとして長く機能しているのは明らかである。あのようないやな惨禍の記憶を如何に忘れていくかということは、残されたものの課題でもあったのだ。しかしそれがサンフランシスコ平和条約発効後に変質し、やがて原水爆禁止運動へと至ったのは今も見るとおりである。1955年から広島市で原水爆禁止世界大会が挙行され、核の平和利用の名のもとに東海村に日本原子力研究所が開設されるのは1957年である。昭和30年代に一挙に変質していく核問題のポリティックスを福間氏は焦点化する。

1950年代から60年代の経済成長期に広島原爆資料館や原爆ドーム、長崎の平和記念公園や平和祈念像などは次々に整備されて平和のモニュメント、災禍の記憶保存として喧伝されていった。そこは誰にも脅かされることのない安逸な平和の場所となった。世界の負の記憶を湛えた場所がこれらと同様に美しく穏やかな場所であることを、私はアウシュビッツや朝鮮半島38度線などの「観光」を通じて良く知っているはずなのに、福間氏も指摘するように、それは「体験から目を背けるかのような営み」であることを行くたびに感じてしまう。いたたまれないほどの恥ずかしさと、それに匹敵する自責の感は拭い難く自らを襲う。東浩紀らが提唱するダークツーリズムにおける単線に結ばれた「善意」は、このようにしてモニュメントや遺跡、そして文化遺産を量産していくのだろう。福間氏が正しく指摘するように、保存の名のもとに記憶は風化していくのだ。

だが、福島原発事故によって原爆文学は「現実」のものとなって私たちの前に帰ってきた。今日本を覆う原発に対するある種の言論統制は、おそらくは文学となってその「現実」を開示していくことになるであろう。「風評被害」の名のもとに核の恐怖を語ることを封殺していこうという方向は、当事者としての被災者にも及んでいる。このパラドックスをどのように解決していけばいいのだろうか。あの3・11から復興したなどとても言えようのない今の日本が2020年にオリンピック招致を目指すという報道にあきれ返るばかりであったが、東京都知事猪瀬直樹が九月一日の震災記念日に、毎年、東京都慰霊塔で執り行われる震災被害者、戦災被害者のための法要を欠席して投票場所であるアルゼンチンに早々と乗り込んだことは、関東大震災、東京大空襲の記憶の風化どころか、3・11、そして福島原発事故の記憶すらももはや風化したのだということを痛感する行為であった。そしてそこに出席した安倍晋三首相は放射能問題は一切ないと断言した。招致が決定して喜ぶ彼らをテレビの画面の上に追いながら釈然としないなどという範囲を越えて、ただただ無力感に襲われたが、テレビのインタビューは残酷にも

福島の被災者にオリンピック招致の感想を求めるマイクを突き付けた。

私はその答えにたじろぎ、感動し、うろたえた。30代かと思えるその女性は静かに「オリンピック招致が決まって本当に良かった。もし、福島が原因となって招致が成功しなかったら日本のみなさまに申し訳ないですから」。彼女が未だ自分の家に帰れない事を嘆きもせず、無策に近い原発事故行政を非難することもなく、淡々とその自責の想いを語った。これは美しい。しかし、それと同時にこの美しい意志を搾取して、何も責任をとらない政治は糾弾されてしかるべきであろう。

おそらくはこうやって圧倒的な災禍は誰も責任をとることもなく、被災した個人に、あるいはそこに心を寄せる個人へと送り返されて、自らを責めさいなみ続けることとなったのであろう。この連鎖は正しくない。どうすればこれを断ち切ることが出来るのか。

今回のこのささやかなワークショップで浮かび上がってくるのは、記憶を改竄して、なお個人へと責任をなすりつける政治システムの実態であろう。その間隙を縫うようにして創り上げられた文学の真の力が発揮されるのはこのような場面においてなのである。少なくとも自責のスパイラルに巻き込まれた人々に、正当な発話と尊厳を取り戻させる装置として、文学が機能することが可能であると信じたい。自らの生を生きることは誰しもが与えられた権利である。核という場所で展開する様々の言説は、もしかすると自らの生を恢復していくためのものかもしれないと思うようになっている。絶対的な孤絶の表象として使われる「真空」は、もしかすると自らを再認する場所の別称なのかもしれない。